月刊　教育情報誌

# 明日への学び

第　１４　号

２０１４年　２月　７日　発行
発　行：福井県教育委員会
福井県学力向上センター
ＴＥＬ：0776-20-0295
メール：gakukyousei@pref.fukui.lg.jp

## 「子どもの主体性を引き出す授業」への転換

### ～日常的に授業研究に取り組む姿勢を大切にして～

昨年１１月、福井県学力向上センターのアドバイザー会議が開催されました。会議の席で、アドバイザーの常葉大学教職大学院 小松郁夫教授から、「教師が授ける『授業』から生徒が主体的に学ぶ『受業』への転換が必要である」という提言をいただきました。「授ける」という言葉には、師が弟子に教える、つまり、目上の者が目下の者に一方的な知識を伝達する意味があります。一方「受ける」という言葉は、受け身で消極的な印象を持たれるかもしれませんが、主語は生徒であり、これからは生徒が主体的に「受ける」授業づくりが大切であるというご助言でした。

福井県では、授業研究体制が整った学校が多く、研究主任を中心に熱心に授業研究に取り組んでいます。これは他県の先生方からも認められているところです。しかし、基本的生活習慣の確立や日常的な指導、基礎学力の定着に至るまで、近年、学校現場に求められる役割は多く、その中で日常的に授業研究を積み重ねていくことは難しい問題です。そんな現状であっても、教員にとって、日々の授業こそが校務の根幹です。一時間一時間の授業の中で「子どもを育てる」という意識を強く持ち、授業研究に取り組んでいかなければなりません。

「研究授業があるから、それに向けて研究会をやる」とか、「公開授業があるからグループ学習をやる」というような消極的な姿勢を見直し、日常的な研究会を効率的に開く体制を作ったり、毎日の授業に向かう意識を少しずつ変えたり、小さな工夫から始めることが大切です。

経験年数の浅い教員の中には、現場の流れに飲まれるように授業研究に取り組んでいる方もいらっしゃるのではないかと思います。今回の記事には、これまで理解が不充分だったかもしれない新しい授業観の説明がふんだんに盛り込まれています。グループ学習の必要性や「協働」で学ぶ意味など、この機会に理解を深め、ご自分の授業観を問い直してみてください。

＜目　次＞

○[授業]から[受業]へ～小松郁夫氏インタビュー～Ｐ　２
○反転授業～近畿大学附属高校の取組み～　Ｐ　４
○『学習者主体の授業づくり』～秋田喜代美氏インタビュー～　Ｐ　８
○「子どもの主体性を引き出す授業」への転換　Ｐ１２
○授業実践レポート～丸岡南中 堂髙晶子教諭～　Ｐ１４
○連載「希望学」④～五百旗頭氏インタビュー～　Ｐ１６
○連載「派遣教員インタビュー」②（長野県）　Ｐ１８
○報告「中高授業改善事例に関わる公開授業②」　Ｐ１９
○お知らせ　Ｐ２０

全教員向け

# 「授業」から「受業」へ

## ～なぜ、今「学習者主体」なのか～

## 小松 郁夫 氏インタビュー

福井県学力向上センターのアドバイザーをお願いしている、小松郁夫氏のインタビューです。第３号でもＩＣＴ教育についてお話をうかがいましたが、今回は、「学習者主体の授業への転換が必要な理由」についてのお話です。教育社会学の立場から、わかりやすい説明をしていただきました。

### 小松 郁夫（こまつ・いくお）

常葉大学教職大学院教授。国立教育政策研究所名誉所員。
前文部科学省初等中等教育局委員。前東京都足立区教育委員。
1947年秋田県生まれ。1979 年東京教育大学大学院博士課程満期退学。
同年東京電機大学理工学部専任講師。1981 年 同助教授。
1993 年から、国立教育研究所（現在の国立教育政策研究所）へ。
2008 年玉川大学教職大学院教授。2013 年から現職。
1986 年および 1998 年、英国バーミンガム大学教育学部客員研究員。
著書に「学校経営の刷新」（共著）、「諸外国の教育改革と教育経営」（共著）、
「『新しい公共』型学校づくり」（共著）。福井県学力向上センターアドバイザー。

### ○授けられる「学び」

歴史を振り返ると、庶民の教育機関としては、江戸時代に広まった「寺子屋」がよく知られています。この「寺子屋」は、読み・書き・そろばんを中心とした、商売や生活に必要な「実用的な学び」の場所でした。一方、農家の子どもたちは、生きていく上で必要な、いわゆる「労働からの学び」を、親たちから授かっていました。つまり、教育は「必要に迫られて」受けていた時代だったと言えます。身につけなければ生活に困る状況における学びであるため、子どもたちは、生活に即して知識や技術を自然に身につけていきました。

### ○社会の変化にともなう教育の変化

現在では、情報社会の目覚ましい進歩によって、さまざまな情報が簡単に手に入るようになりました。それにともない、学ばなければならないこともどんどん膨らんできています。日本では戦後、学校教育制度が整い、すべての子どもたちに平等に教育が保障され、そのことが日本の発展を支えてきました。しかし一方では、「詰め込み型の教育」という批判も受け、「ゆとり教育」への転換も図られてきました。そして最近では、大きな社会変化にともない、活用力や判断力、思考力を育てる教育の重要性が提唱されるようになってきました。

### ○ユネスコの４つの柱

ユネスコの設置した２１世紀教育国際委員会は、１９９６年、「２１世紀の教育および学習を提言する報告書」をユネスコに提出しました。これには、教育方針として「学習の四つの柱」が掲げられています（次頁）。日本語に訳すと微妙にニュアンスが変わりますが、日本の教育は、四つの

うちの①「知らないから学ぶ」と②「できないから学ぶ」という考え方が中心でした。そして、つい最近まで、寺子屋時代や明治初期の「学制」が始まった時期の流れを引き継ぐ形態だったのです。

## ○「学ぶこと」も「関係」も変化

社会の大きな変化にともない、子どもたちの生きる環境は年々厳しくなっています。前述した四つの柱の③「共に生きるために学ぶ」は、元来、民族間の問題や自然との共生の問題から発生した考え方だと思いますが、現代社会に照らしてみると、社会という組織の中で、人とどう関わり、どう協力していくかに結びつけることができます。社会は多様化してきており、人間は複数の組織の中で、さまざまな役割を担って生活しています。このように多様化してきた社会では、個々の役割だけで組織を機能させることは困難です。他の役割を持つ人たちと協力していくことが求められ、コミュニケーションが重要になってくるのです。また、人生観も多様化してきています。さまざまな生き方が可能な時代においては、「自分はどう生きるか」という選択や判断が重要になります。こういった意味で、四つの柱の④「人間としての生き方を学ぶ」が注目されてきているのです。つまり、２１世紀の学びは、四つの柱の①と②は言うまでもなく、③と④の重要性が高まっているのです。これがまさに、これからの教育に「協働」学習が必要な理由です。

学ぶべき情報量の変化は、教員と生徒の学びの関係にも少しずつ変化をもたらしてきています。記憶力や言語能力の習得は、若年層のほうが優れているというのが定説ですが、ＩＣＴの使い方やＳＮＳとの関わりなども、子どもたちの方が進んでいる面が多くなっています。つまり、教員が知っていることやできることを伝えるという、以前のような関係からは変化を余儀なくされています。教員と子どもの双方向のやり取りや、教員と子どもが逆転する関係も、場合によっては生じてくるのです。何を、どう学ばせるかという見きわめも大切な時代になってきているのです。

## ○生徒が主体的に受ける「受業」へ

多様な社会変化や学びの内容・関係の変化は、子どもたちの学びの意識にも表れてきています。なかなか学ぶ意味を見出せないため、授けるだけの授業では主体的に学べず、学んだ実感も持てなくなっています。

**ユネスコが提唱した「学習の４つの柱」**

①知らないから学ぶ（learning to know）
②できないから学ぶ（learning to do）
③共に生きるために学ぶ（learning to live together）
④人間としての生き方を学ぶ（learning to be）

## ○これからの教員の役割と県の役割

教員は「これからの社会がどうなるのか」に敏感になる必要があります。高等教育に携わる教員は、学校教育の出口に近いため、社会変化を意識する機会も多いと思いますが、小中学校の教員も同様です。少子高齢化やグローバル化が進む中で、学校を開き、地域と連携していくことも重要な時代になっています。小中学校の教員も、社会の変化に目を向け、これからの子どもたちがどういう力を必要とするのかを感じながら、指導していただきたいと思います。

県をはじめとする自治体は、「人材を育てる」と同時に「活躍する場をつくる」ことが必要です。「人材を育てる」という観点では、県内外・国内外で活躍できる人材だけでなく、福井で活躍する人材の育成も必要です。活躍できる場がつくられるのを「待つ」のではなく、「自ら盛り上げる」人材の育成が大切です。そのためには、「自ら盛り上げる」ことが可能な県である必要があります。知識集約型の社会に変化している現状では、地理的なハンディはなくなってきています。たとえば、アメリカのシリコンバレーは、地方でありながらＩＴ企業が集結する地域に発展しています。いろいろなセクションと連携を取りながら、教育行政が孤立しないような方法を考えていく必要があります。

（平成２５年１２月１０日　ご本人にインタビュー）

**全教員向け**

# 反　転　授　業

## ～近畿大学附属高校の取組み～

昨年７月ごろ、民放テレビ局の情報番組で、近大附属高校での取組みが取り上げられて以来、「反転授業」への注目度が増してきています。「反転授業」とはどんなものなのか、近大附属高校を訪問し、先導的に取り組んでいる英語科の中西洋介先生と数学科の芝池宗克先生からお話をうかがってきました。

**＜反転授業とは＞**　本来学校で受けるべき講義を、動画などを利用して家庭で「予習」し、それをふまえて、学校の授業では、応用的な課題に取り組んだり、協働学習を行ったりする学習サイクルのことを言います。このような方法をとることで、より深い理解と効率性を追求する学習が可能になると考えられており、教育現場での研究が始まっています。これまで学校で受けていた講義を家庭で受ける（学校と家での役割を反転する）ため、「反転授業」と呼ばれます。「反転授業」は「究極の予習」を取り入れた学習サイクルと言えますし、家庭で動画を見ることから、ＩＣＴ機器を利用した新しい学習スタイルであるとも言えます。

### ○学校の設備

今年度、入学生全員にｉＰａｄの購入を義務付け、その運用のため、ＷｉＦｉの環境を１年生全教室（と職員室）に整えました。また学校独自のポータルサイト（サイバー・キャンパス）の運用も開始し、授業用の教材等をダウンロードすることが可能となりました。学校・教員と生徒間の連絡配信や宿題・提出物の管理も行えるようになっています。

**＜近畿大学附属高等学校＞**

１年生のみで１，０４８名が在籍する、福井では想像できない大規模校です。学年をクラスグループに分け、中高一貫コース、進学コース、英語特化コース、文理３コースになっています。

生徒はＩＤとパスワードによりポータルサイトにアクセスします。その中に＜画像１＞のような映像ライブラリがあり、＜画像２＞のような反転授業の動画が視聴できます。その他に教員用のサイトもあり、教員が校務処理を行うための校務支援システムも構築されています。

映像ライブラリ　＜画像１＞

映像ライブラリ（反転授業）　＜画像２＞

※上の＜画像１＞＜画像２＞については、http://www.jsh.kindai.ac.jp/hs/education/ict/　をご参照ください。

## ○数学科・芝池宗克先生の授業

今回見学した授業は※ジグソー法と呼ばれている授業形態で、次のようなものでした。

授業開始の時点で４～５人のグループが９班作られています。教室の前後の黒板に、４問（前後各２問）の問題の解答が既に書かれています。

まず、班員は４か所に分かれて移動します。４か所それぞれで、板書した生徒が解説を始めます。各班１人、合計９～１０人程度の生徒が聞き手です。生徒たちは納得がいくまで質問を繰り返します＜写真１＞。

次に全員が自分の班に戻ります。今度は解説を聞いて理解してきた問題を、班員に対して説明します。そしてグループ内で理解を深めていきます。＜写真２＞から、板書をｉＰａｄで撮影して、それを利用して説明したり、議論したりする様子が分かります。基本的に、教員はほとんど質問に答えません。班の様子を見ながら声かけをしています。

終了５分前くらいに、教員が生徒のｉＰａｄに解答を配信し、それを見て、生徒たちはさらに理解を深めあっていました。

＜写真１＞

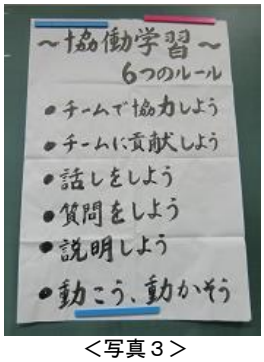
＜写真２＞

※社会心理学者 Elliot Aronson らによって開発されたグループ活動構成手法。
東京大学 大学発教育支援コンソーシアム推進機構（COREF）のＨＰを参照してください。 http://coref.u-tokyo.ac.jp/concept

## ＜数学科・芝池宗克先生、インタビュー＞

## ○「反転授業」は、数学の力だけでなく社会人として必要な力をつけるための手段

生徒たちには、数学を通じて論理的思考力や問題解決能力などを身につけてほしい、その上で、テストや受験だけに左右されず、将来社会人として生きていく力もつけてほしいと願っています。そのため授業中に、説明する力をつけたり、人との関わりを持つ機会を増やしたりする協働学習を取り入れたいと考えました。英語科・中西先生の影響で始めた「反転授業」ですが、協働学習のための有効な手段だと考えます。




＜写真３＞

反転授業は、文理コース（６クラス中３クラス）で行っています。たとえば２学期中間考査と期末考査の間は約６週間なので、予定進度の動画を事前にアップし、１１月上旬までに予習するよう生徒に伝えました。動画は１本１０分以内で、教科書に即して作成し、定義や例題・問題の解説です。予習したことは各自がノートにまとめます。授業では、問題演習を重ねて内容定着をはかるとともに、ジグソー法で協働学習を行いました。１時間の授業で動画３本分ほどの進度で、６週間分の授業を４週間で終えられます。残り１～２週間は、教科書の章末問題などを用いて、再度内容の定着を図りました。最終段階では個別に学習する時間も大切だと考えています。

動画の撮影には、声と筆跡が録音・録画される Camtasia Studio というソフト（前頁＜画像２＞参照）を使用しています。１０分の動画作成に３０分ほどかかり、労力は必要です。しかし、授業中に一斉に解説していた部分を動画にすることで、協働学習などに回す時間が捻出できます。実際には、見なくても理解できる生徒は視聴する必要がないため、全員が動画を利用しているわけではありません。解説動画は、自分の力で予習できない生徒を支援するためのものだと考えています。

反転授業を実施していないクラスとの学力を比較すると、１学期は考査の平均点で水をあけられたこともありましたが、最近では逆転することが多くあります。目先の考査の結果にこだわらず、模擬試験などの長期的な視点で「学力」の成果を確認していきたいと思っています。

## ○英語科・中西洋介先生の授業

最初１０分程度は前時の復習です。前時で学習した教科書本文の音読を、※Shadowing check という方法で行い、そのあと Summary(要点)の質問を指名により行いました。 ※説明は次ページ

次の２０分は動画で予習をしてきた範囲の本時の学習です。

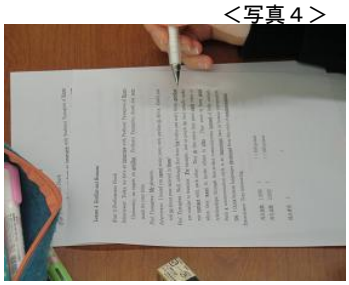
・スクリーンに映された本文（デジタル教科書＜写真５＞）を見ながら１回目の音読
・「ディクテーションシート」を用いて、iPad を聞きながら本文の空欄補充
・スクリーンを見ながら２回目の音読
・本文の確認（単語・熟語のピックアップや、内容の質問など短時間で）・スクリーンを見ながら３回目の音読
・Shadowing check
・Read and look up
・プリント空欄補充による Summary

＜写真５＞

**＜Read and look up＞**
本文の２～７語程度に切られたフレーズを、教員の“Read”の指示で黙読し、“Look up”の指示で顔をあげて声を出して暗誦するという作業を繰り返します。

**＜Shadowing check＞**
ペアになり、一人が iPad から流れる音を聞きながら発声し、もう一人がそれを採点します。採点者は、本文の中の語が発声できているかをチェックして採点するという方法です（＜写真４＞は採点している様子）。

＜写真４＞



＜写真６＞

次の１０分は、ＮＢＣのニュース動画を見せて＜写真６＞内容を確認しました。ドローンズ(Drones)についての話題でした。残り１０分は別の教科書の内容です。単語チェックや小テスト、Read and look up などを行いました。

## ＜英語科・中西洋介先生、インタビュー＞

### ○２倍のスピードで体験値を高める

担当は英語特化クラスで、基本的に他のクラスと授業進度をそろえる必要がありません。１冊の教科書を数回学習させ、英語の体験値を上げることが目標です。「真の英語力をつけるには、偏差値より体験値を上げることを目標にしたほうがよい」という考えからです。現在は２回目で、アウトプット中心に進むため、今日のような音読の多い授業になります。１回目より短時間で一つのパートを終えられるため、ＮＢＣのニュース動画を見せたり、２社目の教科書を学習したりする時間が生み出されます。「反転授業」の実施により、一般的な近大附属高校の授業の２倍のスピードで進めるようになりました。

学力下位の生徒には、複数回繰り返すことで、１社目の教科書をしっかり定着させるという意図があります。学力上位の生徒は、２社目、３社目の教科書の予習動画を見て取り組むことで、自分で力をつけることを期待しています。つまり１社目の学習で“learn how to learn”（学び方を学ぶ）ことを身につけて、どんどん自学できるようになってほしいと思っています。

動画作成には、Think Board というソフトを使っています。内容は、本文の訳や構文の解説で、１０分の動画を作るのに、１０数分で十分です。以前から動画作成の研究はしていましたが、著作権の問題で教科書本文を使用できず、断念していました。ところが昨年、「ＩＤとパスワードでログインする形で、一部の生徒に教育目的で使用するだけ」という条件で、教科書会社から許可が出ました。学校のＩＣＴ環境が整ったタイミングで、反転授業の実施に踏み切れたのは幸運でした。

### ○「反転授業」導入の目的を明確にする

「反転授業」を行うことで時間的な余裕が生まれましたが、それによって何を実現したいかという目的を明確にする必要があります。英語科で言えば、今まで教室で行ってきた日本語による解説の部分を、予習動画で終えることによって、授業では本文の理解定着やインプットおよびアウトプット量を増やすことが可能になり、「英語習得」を目的にすることができます。

### ○ＩＣＴの導入について

授業のＩＣＴ化が進み、個々の生徒にタブレット等を持たせることで、できることが増えます。知識伝達型であれば、説明上手な教師のビデオ等が、授業の役割を果たすことにもなってきます。しかし、生徒の能力は、ただ知識があればよいというものではありません。知識基盤社会だからこそ、授業では、教師と生徒のやり取りから生まれる新しい知識や能力を習得することが重要になってくると思います。たとえば、論理的、批判的、創造的に思考し発表できる能力です。

そのためには、教師自らの個性や肉声を授業に生かし、生徒の頭脳や心に訴えかけていく技量が問われてきます。教師自身もこれらの能力の向上を目指しつつ、「自分とは何者か」「自分はなぜ教えているのか、また何を教えるのか」といった教師としての根本的な問題と向き合い、答を探さなければ、このＩＴ時代に教師として生き残ることができなくなってしまうと思います。

（１２月３日　両氏の授業見学とインタビュー）



## 研究発表会案内（教育研究所）

平成２５年度 第３０回福井県教育研究所 研究発表会

**～伸ばそう 福井の教育力～**

**［期　日］ 平成２６年２月２０日(木)**
**［会　場］ 福井県立青少年センター・福井県教育研究所**
**［日　程］**

**［プログラム紹介］**

**シンポジウム**

テーマ　「福井の教育 ～派遣教員からの提言～」

| | | |
|---|---|---|
| 報 告 者 | 坂井市丸岡中学校教諭(佐賀県) | 北原　成之 |
| | 越前市吉野小学校教諭(熊本県) | 宮脇　真一 |
| | 福井県東京事務所企画主査 | 戸羽　嘉和 |
| | 愛知県立時習館高等学校教諭 | 家根谷　直登 |

★県内外の４人の派遣教員の先生方から見た福井の教育について報告していただきます。また、その内容について質疑応答などを行います。

**講　演　会**

演　題　「ロボットは東大に入れるか？
～比類なき技術革新時代の中で問われる教育の役割～」

講　師　国立情報学研究所 社会共有知研究センター長　新井 紀子 教授

【プロフィール】

情報社会相関研究系教授。東京都出身。2001 年より、教育機関・公共機関向けの情報共有基盤システム NetCommons を開発し、現在、3000 を超える機関でポータルサイトやグループウェアと 2011 年より人工知能プロジェクト「ロボットは東大に入れるか」プロジェクトディレクタを務める。主著に、「コンピュータが仕事を奪う」(日本経済新聞出版社)など多数。

**・研 究 発 表**

所内外２１本の研究発表を行います。今年度は幼児教育をはじめさまざまな校種、教科などにおいて、多岐にわたる発表が用意されています。

全教員向け

# 「学習者主体」の授業づくり
## 秋田 喜代美 氏インタビュー

「学習者主体の授業はどうつくっていくのか」。福井をはじめとする全国各地の授業研究に関わられ、今や、学び合いの授業の第一人者と言っても過言ではない、秋田喜代美氏にインタビューすることができました。１時間弱の短い時間でしたが、多くの情報をレクチャーしていただきました。これを読んで、２１世紀型の授業のイメージをふくらませてください。

## 秋田 喜代美（あきた・きよみ）

東京大学大学院教育学研究科教授。博士（教育学）。専門は教育心理学、学校教育学、保育学。
1957年大阪府生まれ。1980 年東京大学文学部社会学科卒業。
銀行員、専業主婦を経て、1984 年東京大学教育学部学士入学。
1991 年東京大学大学院教育学研究科博士課程単位取得退学。
1993 年立教大学文学部専任講師、同助教授。
1999 年東京大学大学院教育学研究科助教授。2004 年同大学教授。
主な著書に、「読書の発達過程」、「子どもをはぐくむ授業づくり」、
「教える空間から学び合う場へ」（共著）、「学びの心理学－授業をデザインする」。
日本保育学会会長、日本読書学会会長、世界授業研究学会（WALS）副会長。

### ○「学習者主体」の授業の誤解

「学習者主体」の授業と言っても、ペアやグループ活動をすれば「学習者主体」になるわけではありません。「子ども自身がその課題に向き合おうとして、頭の中で思考が働いているか」が問題なのです。だから、教師が教壇に立って話す場合でも「学習者主体」の授業もあります。「教師が価値のある話をし、生徒の心が動きその世界をイメージできて、それをみんなで聞いている」という一体感が大切です。あくまでも「学び手の心のありよう」であり、ノウハウや形式ではありません。生徒が学びたい、考えたいと思って、自分の声や表現を作り出せるような、授業の内容や展開になっていること、その心理の把握が、「学習者主体」の授業を考えるポイントです。

さらに重要なのは、「学習者主体」の授業を「活発な積極性のある授業」だと誤解しないことです。「学習者主体」の授業は、「生徒の声を聴く」ことから始まります。仲間の話を価値あるものとして聴く中から、自分の考えが生み出されます。つまり、深く考える時間が保証されていたり、仲間の考えにふれることができたりすることが大切で、単に話し合う授業ではありません。「考えの違いがクラスの中で生かされるような授業」を、ヴィジョンやイメージとして持つことが必要です。

また、「学習者主体」は、先生が教えたり語ったりしてはいけないという誤解もあるようです。自発性と主体性は違います。どの子どもも自発的にやれるわけではありません。仲間の話や面白い教材、教師の説明で、心が動き始め、考え続けたいという気持ちが生まれたとき、それが主体性になるのだと考えています。教師の力で生徒の主体性を導くことも必要なのです。

### ○たとえばこんな授業はどうでしょう（最近見た授業例を少し紹介します。）

小学校で台形の面積を求める単元です。各グループで考え方を話し合い、何通りかの考え方が出されました。よくある授業パターンでは、ここで応用問題を解かせます。ところがこの授業では、ある「解法」が提示され、それがこれまでに出された考え方のどれにあたるか、そう考えた理由を説明できるかを考えさせていました。単に、「解けた」「解けない」では終わらず、さまざまな考え

方をより深く学ぶことで自覚し、それがその次の学びに活用できるようつながっていると思います。

高校で、政治のしくみ、政治思想について学習する授業です。通常なら、君主制などの政治形態について教師が説明して考えさせたり、資料を配って説明したりする授業が多いと思います。この授業では、「人口が増え、争いや犯罪が多くなっている自分の村を、よくしていくためにどうしたらよいか、村の４人の賢者に聞いてみる」という設定でした。４人の意見は、それぞれ教科書掲載の思想家について原書からの引用文章です。このような課題を提示することで、現在の世界諸国の政治状態を例に挙げて議論する様子などが見られました。単に教科書を通して学ぶだけではなく（最後には教科書も使いましたが）、教師が課題を工夫し、生徒が根拠となるような資料を使って考え、グループで意見の違いを語り合い、最後に教師が資料の出典を種明かしする、という授業でした。生徒は思想を暗記するのではなく、出典に戻ってもっと読みたくなったと思います。生徒にとって切実感がある課題だったため、主体性を重んじる授業になっていました。

## ○授業づくりで考慮すること

指導計画を考える際には、それぞれの授業の質や内容だけでなく、「生徒自身が自分の学習の見通しを持てる」「単元を通して『ふりかえり』を考えられる」ことが重要です。

生徒自身が「何を学んだか」、「もっと知りたかったことは何か」などを、ノートやポートフォリオを利用して簡単なレポート等にまとめることで、定期考査という機会だけではなく日常でも振り返りが可能です。学習者によっては、学びの習得は必ずしも１００％ではないかもしれませんが、その子なりに振り返って、育った実感や学べた実感を持てることが大切です。こうした経験を積んで、「学習者」や「学習者としてのアイデンティティ」が育っていくのではないでしょうか。

「教えるべき内容が多く余裕がない」とお考えの先生もいらっしゃると思いますが、限られた時間の中でも、生徒自身が見通しを持てる授業展開が大切です。授業の最初に本時の課題を教師がいきなり提示するのか、前時と結びつけながら自分たちでとらえていくのかで、大きな違いがあります。そういう意識を教師が持つことで、わずかの意識の積み重ねでも、大きな差ができてきます。

ある小学校では、教室に過去の自分のノートやファイルをきれいに管理していました。いつでも学びの履歴を自分で振り返ることができるからです。そうすると、「あの時やったこととつながった」と実感することができて、さらに丁寧に残すようになります。小さなことかもしれませんが、これらの立ち戻りとつながりの実感の積み重ねが、学習者主体の授業をつくっていきます。

知識・技能やスキルも当然大切ですし、自分に合う他者の授業スタイルを取り入れていくことも大切です。二項図式で、「学習者主体＝グループ学習」「教師主導＝一斉指導」と考えることには誤解があり、それぞれの子どもの「学習者としての尊厳」が大切にされていることが基本です。クラス全体を学習者として育てていくには、生徒の固有名（名前）の取り扱いも大切です。授業の効率だけを優先し、考え方の紹介で終わっている場合がありますが、「これを考えたのは○○さん（○班）だね」というように、名前（著者性）を大切にする必要があります。それがその子の自信と次への参加動機につながります。

考え方を生徒に問う場合も、ＡorＢという二者択一ではなく、「（それ以外も含め）迷っている」という意思表示が堂々とできる授業の雰囲気が重要です。授業を通して考えを深め、立場が明確になれば、学習による変化を子ども自身が語れることになります。これがまさに、学習を進めながら子どもが変わっていく様子をとらえるということです。教科書や塾でＡかＢかがすでにわかっていて、１時間かけても「学びがほとんどない授業」にならないよう注意しなければなりません。

## ○福井の上位層をさらに伸ばすために

子どもたちに必要な知識をわかりやすく教えることも、先生の大切なスキルです。しかし一方で、

子どもたち自身がそれを使い、使える手ごたえを持つことも大切です。質の高い課題が提示され、それに取り組むことで、わかりやすく教わったものが本当に身についたか検証できます。教師は、基礎的な共有の課題と発展的な課題を提示できることが大切なのです。福井の特徴として、下位層の生徒が少なく、トップ層の生徒のさらなる伸びが期待できることが挙げられます。教師が発展的な課題を提示できているかが課題です。基礎がきっちり理解できることはもちろん大切で、説明や一斉指導の形態が悪いとは全く思いません。福井はそれがよくできているのが、下位層が少ない理由の一つだと思います。しかし、学習の定着と次への発展を考えると、より質の高い課題の提示が大切なのです。また、質の高い課題と向き合うには、一人よりも「協働」でやるほうが有効です。仲間と一緒に解いていくことで、解けた喜びが倍加し困難は半減します。

課題などを提示する場合、断片化して小刻みに与えると、子どもの中でも断片化されたままで、「だから覚えなければならない」という感覚で受け取られます。教科の系統性から、「この課題がその後にどうつながるのか」と教師が意識することが大切です。中・高校生の場合には、そういった見通しを自ら持たせることも可能だと思います。

### ○質の高い課題が提示できることが教師の力量

先ほど述べたように、普段の授業では、次につながる課題の提示が大切です。質の高い発展的な課題をいかに提示できるかが、教師の力量です。基礎の知識がなければ発展はできませんし、発展をやることにより改めて基礎に気づきます。だから、発展的な課題をやりながら基礎に戻ります。高校になるとある程度学力により層別化されてきますが、発展的な課題を与えることは、学力の高い層だけでなく、低い層の子どもたちにも有効です。しっかり考え、自分の尊厳を大切にしながら、知識をフル稼働して取り組むような課題は、どの生徒も好きなので喜んで取り組みます。そうした学びの機会が、学力の低い層ほど少ないため、なおさら学習者としての主体性が発揮できなくなります。子どもたちに合わせた挑戦的課題を考えていけるような、「教師の力量」こそが問われていると私は思っています。

### ○中学生に文法を教えるプロジェクト

現在、中学生に文法を教えるプロジェクトに取り組んでいます。英語においては「文法嫌い」な中学生が多く、国語の古典文法は授業でほとんど扱わないのが現状です。体系的に日本語文法を説明しながら教えることができれば、その後の古典文法・漢文法理解につながります。現代文においても、難しい論説文を読むときなど、作家固有の表現を知るのに文法の知識は有効です。近年、英語教育では、学力の高い子の指導には文法を重視しても、学力の低い子は文法をやると苦手意識を持つので、「会話などのコミュニケーション重視で、楽しみながら英語を好きになるように」という指導に流れがちです。しかし、言語には文法構造があると学んでおくことは、国語・英語だけでなく、他の外国語を学ぶ際にも深い概念理解につながります。狭く考えすぎず、言語の構造などを協働学習でしっかり学んでいくことが大切だと思っています。構造が分かれば、「文法は暗記」という印象を払拭できます。なぜ文法を学ぶのかを納得できることが重要です。「この単元の文法は○時間配当で定期考査は大丈夫」という考えではなく、教師がもっと奥行きを持って教えていけば、生徒の学び方は違ってきます。

### ○学校全体の組織作り

「課題」を考える力量をつける場合、一人では限界があります。福井の場合、学校を越えたいろいろな研究部会がありますので、それをふまえて校内研修などで充実、発展させていくこともできます。学習者主体のイメージをお互いにすり合わせて、校内のどの教科のどの先生も、学習者主体

の授業を行うことが大切です。特定の先生に限られると、子どもは、授業ごとに先生のやり方に合わせる（先生の意図だけを汲み取って動く）ようになり（我々は teacher wise な子どもと呼んでいます)、これでは学習者主体とは言えないと思います。

全校を通して２１世紀型の学びを見つめたときに、「学習者主体の授業とはどういう授業なのか」を共有し、小学校なら６年間、中学校・高校なら３年間、それぞれの「学習者像・授業像」を持って取り組むこと、つまり「発達の連続性」を考えることが大切なのです。「学校としてこういう力をつけたい」という切実感が出てくることが理想です。これは、学習者主体か教師主導かと机上で議論しても始まりません。一つひとつの授業の中の可能性、生徒が主体的だった場面、逆に主体性を失わせてはいなかったかなど、実際の授業と検討会を通して発見していき、次の可能性を考えていくことが、具体的に授業を変革し、学校として学習者主体の授業をつくる基本となるのです。

### ○高校では「学校を開く」

学校を開くのが一つのポイントです。その空気が、管理職だけではなく学校全体にあるとよいでしょう。中堅教師たちがそういう役割を担うことが大切です。若手の教師は、２０世紀の伝統的な授業をする先輩教師の知識を吸収しながらも、イノベーションで変化していく２１世紀の知識にも柔軟に対応できるはずです。この可能性に取り組み、教室を開くことで、若手から中堅・ベテラン教師が学べる、２１世紀型の「学ぶ力を育てる」授業のあり方を、学びあえる学校になるでしょう。

### ○授業研究のモデル高校の設置

福井の場合、福井大学教育地域科学部附属小・中学校がある程度「像」を出していますし、福井大学教職大学院の先生方が新たなあり方を発信してくださっていますが、これまでの授業研究の取組みは、小・中学校が中心でした。今後は、高校のモデル校ができるとよいと思います。高校の場合、全国的にはかなり授業と授業研究の改革が進んでいます。中でも学力下位層の学校は、改革で目に見えた成果が表れることが多いので、先進的な学校をモデルとしてみんなで考えていくのがよいでしょう。学力下位層の学校には、本当は学びたいが十分に力を生かせないと思っている子どもが多く、切実感が大きいからです。そういう子どもたちは個で学ぶことが中心で、学びの人間関係が切れていますので、つながりをつくることで学力が目に見えて上がってくれば、大切さが伝わると思います。県内で３割程度の高校が変わってくれば、県全体の授業が変わってきます。モデル校で先生方がよい取組みをされると、変革は促進されます。モデル校があれば、新しい授業のイメージはどこを見ればよいかが明確になり、他校の模範となるでしょう。トップ進学校の改革はなかなか困難です。進学校の背負うミッションがありますし、保護者のニーズが違います。指導困難な学校では、誰もが学んでほしいと思っていますが、一方的に教師が教えるスタイルが強く、学ぶ機会が与えられない場合も多いのです。これらの改革やモデル校づくりは、先生方の「自治」で行われ、管理職や教育委員会のサポートがあることが理想でしょう。たとえば研究授業の事例をＤＶＤで紹介したり、学校の組織・授業づくりのイメージを県下の高校に広げたりといった支援です。新たな取組みを始めている学校や先生の事例を県下に発信したり、実践報告会で紹介したりすることで、「私たちの学校でもやってみよう」という広がりが出てきます。

### ○「学習者主体」の授業の効率性

学習者主体の授業は「情報伝達の効率性が落ちる」と思っている教師も多いようですが、そうでしょうか。学習者から見てどちらの効率がよいかと考えると、「知識の定着」や「理解の深まり方」などで差が出ると思います。大学での私の講義も、最初は「じれったい」と思う学生がいましたが、現在では、「そのほうが深く学べる」「教師一人の声ではなく、教室にいる他者の声が聴ける」という感覚を持ったほうが身につくし、効果的だと気づいてくれるようになりました。

（平成２５年１２月１１日　ご本人にインタビュー）

全教員向け

# 子どもの興味・関心を高め 主体性を引き出す授業への転換

## ～授業研究の本質理解と教師の力量形成～

２００４年のいわゆる「ＰＩＳＡショック」を受けて、「ＰＩＳＡ型学力」を意識した授業が展開されるようになり、全国に浸透していきました。しかし、子どもたちの学習意欲という点から見ると、改善されたとは言い難い現状も明らかになっています。

### ○ＰＩＳＡの結果は上昇傾向

昨年１２月に、２０１２年実施のＰＩＳＡの調査結果が発表されました。日本は、「数学的リテラシー」「読解力」「科学的リテラシー」の３分野のどれをとっても、０３年、０６年と低下していた順位が、０９年、１２年と上昇傾向に転じています。

その要因として、「脱ゆとり教育の成果」を挙げている全国紙もありました。しかし、中学校でゆとり教育を見直した新指導要領が導入されたのは、２０１２年のことです。つまり、２０１２年の高校１年生（上記の調査対象学年）は、小・中学校の９年間を旧指導要領（一部先行実施）で学んできたわけで、直接の理由にはなりません。

この学年の子どもたちが小学校に入学したのは２００４年ですが、このころは、ちょうど０３年の結果が公表された「ＰＩＳＡショック」前後であり、日本社会全体に学力低下批判が高まっていた時期でした。それを受けて、「知識偏重ではなく、ＰＩＳＡ型学力を高めようという意識が、教育界をはじめとして社会全体に浸透してきたことによる成果」を挙げる有識者もいました。

＜ＰＩＳＡ＞　経済協力開発機構（ＯＥＣＤ）が、２０００年から３年ごとに実施している学習到達度調査。１５歳男女が対象で、実生活のさまざまな場面で、知識や技能をどの程度活用できるかを評価している。「数学的リテラシー」「読解力」「科学的リテラシー」の３分野に加え、学習意欲や環境を尋ねる質問紙調査もある。

### ○「学習意欲」はあまり改善されず

ＰＩＳＡでは、知識・技能を実生活で活用できる力（活用力）が問われます。それを意識して、２００７年から復活した全国学力テストでも、活用力を問う「Ｂ問題」が出題されるようになりました。この「ＰＩＳＡショック」と「Ｂ問題」の影響もあって、「活用力を高めるための授業への転換」が、全国的に浸透していったと考えられます。

しかし、今回のＰＩＳＡの調査結果から、「学習意欲」という点での課題が見えてきました。たとえば「数学で学ぶ内容に興味がある」と答えた割合は３８％で、０３年調査に比べて増加してはいるものの、ＯＥＣＤ平均に比べると１５ポイントも低い結果です。他の学習意欲を問う質問でも同様の傾向が見られました。意地の悪い言い方をすれば、改善されたのは「テストの点数」のみというわけです。

### ○学習者主体の授業への転換

近年の日本の教育の流れを振り返ると、「詰め込み、知識偏重」から「ゆとり」へと流れていたものが、「ＰＩＳＡショック」を受けて、「活用力の育成」へと一気に舵が切られた形です。「活用

力」を意識して、知識伝達型の授業が改善されつつある方向性は望ましいことですが、子どもたちの学習への興味・関心があまり高まっていないことは大きな問題です。

われわれ教員は、校内研究会や先輩のアドバイス、他校の公開授業などで研鑽を積み、子どもたちのさまざまな力を育てていけるよう、授業づくりを考えています。しかし、時代の流れに沿って新しい授業方法や協働学習を取り入れてはいても、その「本質」を果たしてどこまで理解しているでしょうか。今回の小松教授と秋田教授のインタビューは、「なぜ学習者主体の授業への転換が必要で、どのように転換していけばいいのか」という、「本質」に迫る内容であったと思います。お二人の話は、決してＰＩＳＡを意識されているわけではありません。インタビュー中に「ＰＩＳＡ」という言葉をお聞きすることは一度もありませんでしたが、これから社会を生き抜く子どもたちを育てるための根本を示してくださったように感じました。

### ○反転授業の手法も生かして

教員の役割も、知識や技能の伝授から、学習者が主体的に学ぶためのコーディネーターへと変化しています。学びの形態も変化する中で、ＩＣＴ機器の発展に伴って脚光を浴びているのが、「反転授業」です。近畿大学附属高校への取材や、大学関係者、民間教育機関などから集めた情報をまとめてみます。

**★授業前に生徒自身が知識・情報を獲得することで**

・教師主導の知識伝達型授業に比べると、課題意識を持って授業に臨むことができます。
・予習を自主的に進めることにより、計画力・自己管理力・メタ認知能力の向上が期待できます。
・授業で知識やスキルを伝達する時間が省かれ、その分、知識の定着や発展的課題の学びあいの時間などに充てることができます。

一方で
・動画による予習をしない生徒にとっては、授業での学習効果が期待できず、従来型の知識伝達の授業よりも学習効果が上がらない可能性があります。

**★教員の力量に関わること**

・何を動画で与えて、何を授業で扱うかの取捨選択をどうするか。
・動画で与えた内容を踏まえ、何を目的に授業を展開するか。

たとえば数学の定理や公式などの習得には、その理論的な背景や美しさを、教師と生徒、あるいは生徒同士が共有しながら獲得していくことで、より深い学びとなることが多いと考えられます。「学びを深める」ために有効な題材まで動画で与えてしまうのはいかがなものかと思います。

**★その他の課題**

・取り扱う内容が同じでも、教員それぞれの授業展開は千差万別です。画一的な動画を使用すれば、個々の授業の自由度が制限される可能性があります。しかし、すべてオリジナルで動画を作成するのは、学校や個人の大きな負担になります。
・予習動画により、家庭での生徒の学習量の負担が増える恐れがあります。

ＩＣＴ機器の導入が進めば、情報伝達や指導の効率化が進むことは間違いありません。それを生かし、さらに反転授業の利点も上手に活用することで、授業づくりの新しい可能性が広がります。今後は、こういう新しい視点での授業研究も必要となってくるでしょう。同時に、授業づくりの原点である、「授業にマニュアルはない」、「授業は教師の力量で決まる」ということを、改めて認識し、日々研鑽に努めなければ、社会の変化に流されてしまうことになります。

全教員向け

# 全員が参加した実感を持てる授業

## ～「学びあい」の授業づくり～

## 坂井市立丸岡南中学校 堂髙晶子教諭の実践

１１月１５日に中高授業接続ガイドの事例に沿った国語の公開授業を、授業名人の堂髙晶子教諭（坂井市立丸岡南中学校）に実践していただきました。今回はこの授業の報告に加え、堂髙教諭へのインタビューもお伝えします。授業づくりや校内研究の参考にしてください。

### ○公開授業の様子

＜授業内容＞　**平家物語の魅力をプレゼンテーションで発表しよう**

今回は、中高授業接続ガイドで取り上げられている２年生の教材「平家物語」について

高校での課題：「古典は難しい」という先入観にとらわれ、最初から学習意欲が不足している
原因：①歴史的な出来事に対して興味が持てない
　　：②古文の理解に時間がかかり、当時の人々の考え方や生き方に共感するところまで深められない

という現状を踏まえて授業を展開してくださいました。

『平家物語』冒頭の一斉暗誦で始まり、前時の「扇の的」の内容確認の後、３～６人の６グループに分かれて話し合いを行いました。生徒は前の時間に、「平家物語」の登場人物５人の中から１人を選び、共感できる点を考えています。本時は同じ登場人物を選んだ生徒たちがグループを作り、自分の意見を述べるとともに、その人物の行動について、疑問点を挙げたり心情を考えたり、その人物を象徴する原文を抜き出したりしていました。各グループでプレゼンテーションを行うという単元の最終目標が明確であり、教諭からの問いかけやアドバイスも的確であったので、生徒たちは意欲的に話し合いに取り組んでいました。

導入部分の様子

班活動の様子

班活動後、各班の声を拾う

＜参加教員のコメント＞
教科書掲載部分をきっちり押さえつつも、あくまでもそれを「きっかけ」として、『平家物語』の世界観にどっぷり浸る活動、ジャンルや教科の壁を越えて行われる言語活動、まさにこういうことなのだと感銘を受けた。／「推しメン」を決めるという言い方とか、先生からのお助けの手紙が用意されているとか、生徒の意欲を高める工夫がちりばめられていて、本当に素晴らしい授業だったと思う。／話し合いの方法が定着しており、グループの全員が自分の意見をしっかり話し、互いに聞き合う姿勢が素晴らしかった。／グループ活動中の生徒への目配りが行き届いていて感心した。／常に問いかけるような話し方で、生徒たちが集中できていると感じた。／先生と生徒の関係、生徒同士の関係が良好で、生徒たちが楽しそうに活動していたところが印象的だった。　＜中高国語の教育情報フォーラムにも掲載中＞

## ＜堂髙晶子教諭インタビュー＞

### ○今回の公開授業と普段の授業で気をつけていること

今回は、古文も現代文と同様に文学として楽しめるということを、生徒に感じてほしいと考えて授業展開を考えました。高校に進学すると、中学校よりも古文にふれる機会が増えます。題材の奥深くにあるおもしろさを感じ取れるような学習ができれば、高校でも伸びていくのではないかと思います。この授業のあとで高校の先生から、「歴史的仮名遣いに慣れる」「音読ができる」ことをお願いしたいとアドバイスをいただきました。

本校の平成２４年度からの研究主題が「学びあう学校文化の創造」ということで、子どもたちが学びあう姿を追求しています。子どもたちが授業に参加できたり、学びの実感を持てたりするのは、小グループによる活動の場合が多く、得られる効果も大きいということで、なるべくグループ活動の機会を多く取ろうと心がけています。グループ活動の中で、練り合ったり、発見があったりという場面をつくるようにしています。充実したグループ活動になるためには、指導計画の中の「どの場面でグループ活動を入れるのか」、「どのような課題を与えるのか」がポイントになると思います。

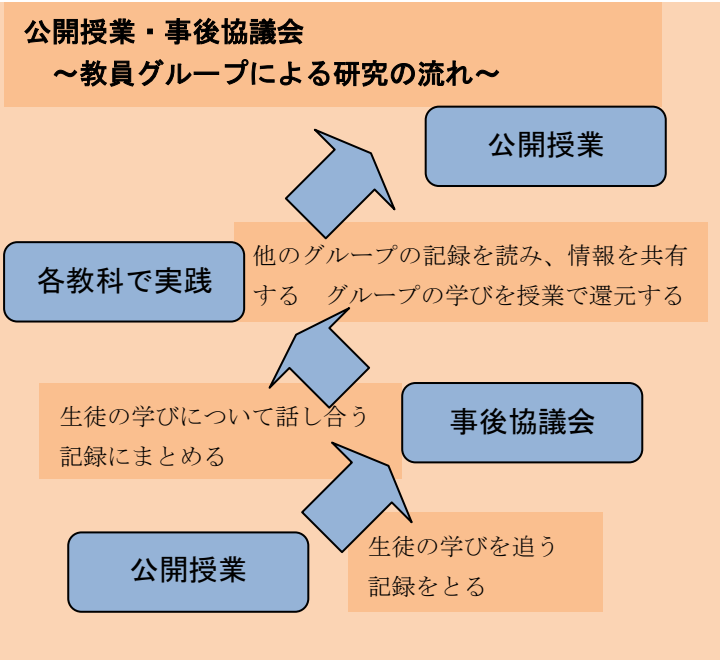
### ○グループ活動の留意点

題材や班員構成などにもより一概には言えませんが、与えた課題に対して、それぞれの班の議論の状況をある程度予想しておかなければなりません。教員が班の活動をチェックしながら、行き詰まりそうな場面で、話し合いの場の近くにいてやれることが大切です。それぞれの班でいつ教員が必要かをある程度想定していれば、子どもたちも「必要な時に先生が近くにいてくれる」という安心感のもと、ストレスの少ない状態でグループ活動を行うことができます。また、初めから行き詰まることが予想できていれば、今回の授業でも使ったように「お手紙」（行き詰まった時に見るお助けプリント）を用意しておくことも有効な方法だと思います。

また、生徒の学びあう学習の雰囲気が構築されるためには、教員と生徒、あるいは生徒同士の良好な人間関係作りが大切です。日ごろからの学級経営の取組みが重要であることは、言うまでもありません。幅広く生徒の状況が把握できるようになれば、活動を行うときのグループのメンバー構成を工夫することによって、多くの生徒の学びのレベルを高めることも可能だと思います。

**丸岡南中学校の研究体制**

- 授業研究部と育成研究部がある
- 育成研究部は生徒指導面における研究を推進
- 全教職員が「授業」「育成」のどちらにも所属
- 授業研究部は複数教科で３グループに分ける（Ａ：国理音養護，Ｂ：社英美，Ｃ：数体技家）
- 月１回、公開授業を実施（全員が年１回は実施）
- 公開授業では各グループ２授業を公開、メンバーは２つに分かれて、参観と事後協議会を実施
- 参観者は生徒の学びを中心に見とり、授業者が気づかない細部を見て、全員で生徒を育てるという姿勢で参観する
- 事後協議会の記録に目を通して、他のグループの学びについて共有する
- 授業参観を通した学び合いを研究授業づくりに生かし、全教職員が研究授業に携わる体制を構築




（平成２５年１１月１５日　公開授業、１２月１３日　ご本人にインタビュー）

連　載

# 「希望学」④　～ 五百旗頭薫氏インタビュー～

「希望学」の連載４回目です。今回は東京大学社会科学研究所准教授の五百旗頭薫氏のお話をうかがいました。五百旗頭氏は、２か月に１度くらいのペースで、３年ほどかけて福井の調査をされました。現在、嶺南地域について論文を執筆中です。今回のインタビューでは、１時間半も取材にお付き合いいただき、さまざまな深みのあるお話をお聞きすることができました。文字だけでお伝えするのが難しく、お考えを伝えきれていないかもしれませんが、じっくりと読んでみてください。

## 五百旗頭 薫（いおきべ・かおる）

1974年兵庫県生まれ。専門は日本政治外交史。
東京都立大学助教授、首都大学東京准教授を経て、東京大学社会科学研究所准教授。
著書に「大隈重信と政党政治－複数政党制の起源 明治 14 年－大正 3 年」（東京大学出版会）、「条約改正史－法権回復への展望とナショナリズム」（有斐閣）など。

### ○福井は多様で個性的な地域

１８７１年の廃藩置県以後、統合や境界変更などを繰り返し、１８８１年に石川県の嶺北と、滋賀県の嶺南が統合された形で、現在の福井県が誕生しました。この経緯をふまえると、福井県は、異なる歴史と文化を持つ越前と若狭が一つになった、ある意味「人工的な県」と言えます。今回の調査によって、福井県の歴史的背景から「県民性」が浮かびあがってくると思っていましたが、実際に調査してみると、多様な、それぞれの地域の「個別性」が明確になってきました。福井県に限ったことではないのかもしれませんが、福井県の場合、特にこの傾向が顕著でした。

※福井県誕生までの歴史　http://www.pref.fukui.jp/kids/history_kiji.php?eid=00018

### ○「福井とは何か」「今なぜ自分はここにいるのか」

「福井とは何か」…その答が明確なら考える必要はありませんが、実はその答は、明確ではありません。しかし未来に向けて答を探せるという意味では、福井人は恵まれていると思います。

高校生以下の世代では、「福井とは何か」「自分とは何か」と言われてもイメージしにくいかもしれません。そこで、高校卒業時における「進路選択」を例に考えてみましょう。人生において、事前の計画通りに進むことは、現実的にはなかなかありません。生まれてきたこと自体が（生まれた場所や環境など）自分の思い通りにはなりません。自分の希望とは違う大学への進学も、さまざまな事情で起こりえます。しかし、事後的にそこに行く（いる）意味を考えて、「ああ、そういうことなのか。自分はもっとこうしていこう。」と思うことで、「希望」が生まれてきます。成績不振で進学する大学の選択肢が狭められたとしても、「この大学に行くとこういうゼミや研究者や進路がある」と言えるか、「しかたなくこの大学に行く」と言うかでは、大きな違いがあります。

### ○「今なぜ自分がここにいるのか」を考える力

現在、日本で提唱されている改革のいくつかが空回りしている根深い原因の一つに、「今、自分がここにいる」という実感を人が持てないことがあると思います。人は「今なぜ自分がここにいるのか」を考える力をつける必要があります。人生の９９％は「受け入れざるを得ないこと」です。「自分はなぜこの大学（会社・団体など）にいるのか」を考えられる人間に育っていれば、どこに行って（いて）もしっかりやっていくことができます。

### ○「無為な時間」の積み重ね

子どもたちがある課題に没頭しているときは、自我はその課題と一体化しています。このような

ときは、意外と自分自身を見つめることができません。むしろ何もしていないとき（自分がただ自分でしかないとき）に、自分が自分として生きている実感を持てるのです。

私が、津和野（島根県）の小さな教会で、外国人の神父と出会った時の話です。その神父は、以前、神戸のキリスト教系の学校で教師をしていました。どんな教育をしていたのかという話の中で、神父が「とくに教育をした覚えはない。子どもたちと一緒に過ごしていただけだ。」と答えたことが印象に残っています。

子どもにとって、先生をはじめとする大人たちからアドバイスを受けることは大切ですが、「なんとなく話す」無為の時間も必要なのです。子どもがそういう時間を積み重ねるためには、本当は先生もボーッとできていなければならないのですが、それがなかなか許されないのが困りものです。

私が考えているのは、ゆとり教育とは違います。ボーッとした子どもは、特別立派な志を立てるでもなく、徹底して遊ぶでもなく、出された宿題や試験勉強をゴソゴソやっているものです。そういう時期が「無為」だというなら、「無為」こそ教育の基本だと思います。

## ○ふるさと教育について思うこと

９９％をどう受け入れるかが大切であるとお話ししてきましたが、残りの１％ももちろん大切です。その部分は、ふるさと教育に依るところだと思います。小中学校段階では、ある程度のふるさと教育が行われているようですが、高校段階ではあまり行われてないとすると、残念なことです。

福井県の誕生後、元の滋賀県や敦賀県への復帰運動も起こる時代もありました。九頭竜川の治水が公共事業の中心で、嶺北が中心の県という感もありました。そんな中、敦賀－ウラジオストック航路開通は、大和田荘七などの尽力で大きな成果を上げました。しかしロシア革命などで水を差され、大戦後の冷戦状態もあり、日本海を越えてつながろうという動きは、挫折を繰り返してきました。現在は原発問題もあり、敦賀以西については不遇感を持つことが多かったようです。

このような状況では、「福井県とは何だ」という問は「未来の問題」かもしれません。逆に言うと、「福井の未来はこうだ」と自由に作っていってほしいと思います。ただ、いきなり福井について抽象的に考えるよりは、自分の育った町や集落の個性を持ち寄って、嶺南なり福井なりの全体像をイメージするのがいいように思います。

福井には、地域ごとに生み出された言葉があります。地域が持っているアイデンティティや、風土の中で生まれてきた文学があります。嶺北には、三好達治の弟子・則武三雄がつくった北荘文庫、嶺南には水上勉の若州一滴文庫があります。言葉にならない情念とか不満とか欲求が、どうやって言葉という形になるのかについては、地域の風土の中で独特のプロセスがあります。

**則武三雄（のりたけ・かずお）**本名・則武一雄。明治 42 年（1909 年）、鳥取県米子市に生まれる。19 歳で朝鮮に渡り、約 17 年間を過ごす。終戦後まもなく帰国、雄島村（現・坂井市）に疎開していた生涯の師・三好達治のもとに身を寄せる。その後、三好達治が上京してからも、福井の地にとどまり、41 歳で福井市に居を移す。福井県立図書館司書として勤務する傍ら、文学サロン・北荘文庫を創設主宰。独自の出版活動を行い、福井に根をおろした文学活動を展開していく。 地方主義を提唱し、広部英一、岡崎純、南信雄、川上明日夫、荒川洋治ら多くの後進を育てる。数多くの詩集のほか、福井の文学や、越前和紙など福井の文化についての著書を残す。平成元年（1989 年）に福井県立病院に入院。闘病生活中にもベッドで詩を書き続けた。平成 2 年（1990 年）没。（福井県立図書館ＨＰより）

こういったことを分析できる発達段階は、やはり高校生だと思います。「なにを表現したかったのか」「なぜこんな表現に至ったのか」を考えることが、その地域を知り、理解を深め、ふるさと教育につながります。それと同時に、自分の持っている情念などの「言葉にならないもの」を、どう言葉にするか考えていくことができます。これがただちに何らかの希望につながるわけではないですが、希望を作る力へとつながっていきます。

（平成２５年９月４日ご本人にインタビュー）

# 連　載　「派遣教員インタビュー」② ～長野県の先生～

今年度６名（４県）の先生が、人事交流で、他県から福井県に派遣されています。今回は、長野県から福井市松本小学校に派遣されている中上敬介先生にインタビューしました。

## ○確かな学力の育成

中上敬介先生

福井市松本小に赴任して、９か月が過ぎようとしています。長野県からは初めての、福井県での派遣教員受入研修ということもあり、とても緊張して４月を迎えたのを覚えています。

実際に福井県の学校現場に入って感じるのは、教育熱心な先生方がとても多いということです。朝早くから放課後遅くまで、授業の準備や教材研究に励む姿。「一人一授業」で、すべての先生方が進んで授業を公開し、授業力を磨く姿。こんな福井の先生方に囲まれて、刺激ある毎日を送っています。子どもたちは明るく活発で、とにかく「よく遊ぶなあ」というのが実感です。大休みにはグラウンドや体育館が子どもたちで満員になります。みんな汗をかいて体を動かしています。「よく学びよく遊ぶ」、これが福井の子どもたちの印象です。

また福井県では、学力向上に向けた取組みが、非常に具体的に進められていると感じます。とくに「コア・ティーチャー養成事業」は、授業づくりや授業研究の牽引役の育成のために、指導主事の先生が事前の検討会から入り、年間何回も授業研究を行い、授業を練り上げていくという、すばらしい取組み体制だと思います。他にも「授業名人」「教職大学院スクールリーダーコース」等々、教員の指導力向上に向けた方策が、そのまま学力向上につながっていると感じます。これらの取組みをしっかり学ばせていただけたらと思います。

## ○教育県・　長野

長野県では、授業づくりのポイントとして「信州ベーシック」と呼ばれる冊子が作られています。普段の教育活動を進める上で、大切な内容がＱ＆Ａ形式で示され、共通理解が図られています。

現在、長野県で特に重視しているのが、右の３つの観点（①ねらい ②メリハリ ③見届け）を意識した授業づくりです。また、長野県には「信濃教育会」があり、多くの先生方が入会し、自主的に研究・研修を重ねたり、全県で開かれる研究大会に、進んで参加したりしています。さまざまな研究調査部に加えて、県下各ブロックに委員会（全教科）が設置され、各教科の専門性に優れた先生方が委員となって、公開授業、授業研究を積極的に行い研鑽を積んでいます。福井県の先生方に負けず劣らず、長野県の先生方も「教育県・長野」再興に向け、日々がんばっています。

**①ねらい**
→ ねらい（つける力）を明確にしましょう。

**②メリハリ**
→ 授業の流れにメリハリ
（触れて 関わって 考えて 感じて）を。

**③見届け**
→ ねらいの達成を見届けましょう。

３月までの残りの期間、さらにいろいろな研修に参加させていただいたり、すばらしい子どもたちや先生方から学ばせていただいたり、一つでも多くのことを長野に持ち帰りたいと思っています。よろしくお願いします。

公開授業
報　告

中高の接続に焦点を当てた授業で

# 中高授業改善交流会（数学）が行われました

Ｈ２５．１０．２４　於：三方郡美浜中学校

## □公開授業

・授業者　川畑 成央 教諭　・授業クラス　３年中高一貫連携クラス
・授業内容　「関数 $y=ax^2$ 」　・参観者　合計２５名

中高授業接続ガイドにおける「課題」

**「二次関数の最大・最小を、端点だけで考えてしまう」**
に対する改善事例に基づいた授業を実践していただきました

導入課題をＩＣＴ機器で説明

ビデオで発展問題を出題

班で相談している様子

まず､「一次関数のｘの変域に制限がある場合について､ｙの変域がどうなったか」を復習しました。とくに、減少関数の場合に注意が必要なことをグラフで視覚的に確認しました。／次に、ｘの変域に制限のある二次関数のｙの変域についてグラフをかかずに予想しました。その後、グラフをかいて考えることにより、グラフで視覚的に考えると理解が深まることを、実感することができました。また、グラフを四角で囲むことにより、ｙの変域がわかりやすくなることも実感しました。／演習後、落下運動の発展問題にチャレンジしました。ドラマ仕立ての自作ビデオで出題し、生徒の興味・関心を高め、問題に対してスムーズに取り組めるよう工夫されていました。／残念ながら最後の発展問題は時間切れになりましたが、グループで確認や相談をする時間が随所に設けられ、生徒一人ひとりがしっかり活動している授業でした。

## □研究協議会

・参加者　合計２３名

**授業者のコメント**

二次関数の値域の理解に、生徒が思いのほか苦労してしまい、発展問題につなげるのに時間がかかった。変域の問題は実生活に結びつけにくい内容で、考えた末、落下問題を選んだが、与えた数字が何を意味するのかも生徒にはわかりづらく、中途半端な形で授業を終えることになり、生徒には申し訳なかった。

**ー質疑と協議の中での話題をピックアップー**

**＜高校教員から＞**

・高校では係数に文字が入ってくるので、中学校時代に軸だけでグラフをイメージする経験が少しでもあるのはありがたい。
・中学生の場合、方眼がある方がかきやすいのは仕方のないことだと思うが、高校１年生にも、目盛りを打って（数字を入れずに）グラフをかく様子が見える。軸だけでグラフを描かせる指導の際には、座標（数字）を入れる指導をお願いしたい。
・どういうときに両端で最大・最小をとり、どういうときにそうでないかを押さえてほしい。変域に頂点を含むか含まないかの指導は、高校での場合分けの必要性の指導につながる。

**＜中学校教員から＞**

・グラフをかく際は、方眼用紙でかく場合と、軸だけでかく場合を、場面によって使い分けるとよい。実は方眼上にきれいな曲線をかくのは意外に難しい。
・グラフを四角で囲む方法は、「ｘ の変域は左右に注目し、ｙ の変域は上下に注目」すればよいことが分かりやすくてよい。
・一次関数で変化の割合をしっかり押さえておけば、二次関数では ｙ の変域の学習の前に、変化の割合の学習を先に行うとよい。２点の取り方によって変化の割合が変化し、研究の題材になる。
・落下運度は身近な題材として面白い題材であり、是非使わせていただきたい。

※＜中高数学の教育情報フォーラムにも掲載中＞

**＜県教育研究所　中田　政晴　研究員＞**

・導入でＩＣＴ機器を用いており、抵抗なく素直に入っていける雰囲気をつくっていた。
・生徒が考える時間と、考えたことを共有する時間を多くとっていた。高校の授業にも取り入れるべきだ。
・「良いミス」をうまく先生が拾い、ミスした理由をみんなで共有しカバーする雰囲気がいい。
・各自がグラフをかく演習で、「美しい」という言葉を発した生徒がいた。数学の美しさ・楽しさを感じさせる指導が、普段から組み込まれている点がうかがえた。

**＜県学校教育政策課　朝倉　剛司　主任＞**

・高校ではほとんどの場合、原点を用紙の中央に置かないほうが二次関数のグラフがかきやすいし、最終的には軸や定義域が動く最大・最小の問題に対応できなければならない。中学校でマニュアル化しすぎると、高校でそこから抜けられないことがある。
・最後の発展問題はよく考えられた問題であった。既習事項が少ないわりにレベルが高かったが、逆に言えば、今後理解してほしいことを、その問題を通して理解していける題材であった。時間が不足して残念であったが、生徒からの気づきを拾いながら授業を進めたかったのだと思う。いろいろな発想を大切にする授業が高校に結びつく。教員が教え込んでしまうようでは、その先につながる発想は生まれてこない。

# 研究発表会案内（特別支援教育センター）

平成２５年度　福井県特別支援教育センター

## 実践研究発表会

１　趣　旨　特別な教育的ニーズのある幼児・児童・生徒への指導や支援の在り方，園・学校ぐるみで取り組む特別支援教育に関する実践研究の発表を通して，広く意見や情報を交換し，指導の一層の充実と教職員の資質の向上を図る。

２　主　催　福井県特別支援教育センター

３　期　日　平成２６年２月１４日（金）

４　会　場　福井県自治研修所　３階大研修室

５　日　程

【午前の部】　９：２０　～　９：５０　受付　　１０：００　～　１０：０５　開会

１０：０５　～　１０：４５　実践研究発表（１テーマ　発表…20 分）

| 発表 | 研　究　主　題 | 発　表　者 |
|---|---|---|
| 1 | 特別支援学級担任と通常学級担任の協働による障がい理解学習の実践<br>～教師同士の協働と連携が特別支援教育を推進する～ | 坂井市高椋小学校<br>教諭　東角　里美　氏 |
| 2 | 生徒が自ら考え、主体的に連携・協働しながら学んでいく取り組み<br>～キャリア教育を見据えた模擬会社運営による実践～ | 福井県立福井特別支援学校<br>教諭　山田　聖人　氏 |

１０：５５　～　１１：２５　グループ協議　　グループ協議①　第３研修室（発表１）
グループ協議②　第２研修室（発表２）

１１：２５　～　１１：４０　各グループの報告（各グループ協議会場）

１１：４０　～　１２：００　ご講評（各グループ協議会場）　福井大学教職大学院　教授　松木 健一 氏
福井大学教職大学院　講師　笹原 未来 氏

１２：００　～　１３：００　昼食休憩

【午後の部】

１２：３０　～　１２：５５　受付　　１３：００　～　１５：１０　実践研究発表（１テーマ　発表…20分）

| | 研　究　主　題 | 発　表　者 |
|---|---|---|
| 3 | 本校特別支援教育の取り組みについて | 嶺南学園敦賀気比高等学校<br>教諭　堂野　吉央　氏 |
| 4 | 特別支援教育を支える教職員の協働<br>～　校内体制の工夫　～ | 福井市森田中学校<br>教諭　上埜　良子　氏 |

１３：４０～１３：５５　質疑応答　　１３：５５～１４：０５　休憩

| | 研　究　主　題 | 発　表　者 |
|---|---|---|
| 5 | いきいきと活動する　きたなかやまっこ　をめざして<br>～人とのかかわりを心地よいと感じることができる保育の在り方 | 鯖江市北中山幼稚園<br>副園長　大滝　和枝　氏 |
| 6 | 授業者が一番得する授業研究会<br>～　授業力　＜　参観力　～ | 福井県立嶺南東特別支援学校<br>教諭　河端　稔　氏 |
| 7 | 学校の協働研究を支える研修の取り組み<br>～　特別支援教育専門研修の実践から　～ | 福井県特別支援教育センター<br>指導主事（特別支援教育）野村 陽子 |

１５：１０　～　１５：２５　質疑応答

１５：２５　～　１５：５５　ご講評　　福井大学教職大学院　教授　松木 健一 氏
福井大学教職大学院　講師　笹原 未来 氏

１６：００　～　閉会・諸連絡

# 研究発表会案内（嶺南教育事務所）

## 第１９回 嶺南教育事務所

## 教育研究発表会

広げよう！学び合いの輪

**１　期　日**　　平成 26 年 2 月 19 日（水）

**２　会　場**　　福井県教育庁嶺南教育事務所（〒917-0241 小浜市遠敷 2 丁目 205）

**３　日　程**

| 12:40 | 13:10 | 13:55 | 14:05 | 14:50 | 15:05 | 15:50 | 16:00 | 16:45 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 受付 | 第一発表 ①②③ | | 休憩・移動 | 第二発表 ①②③ | 休憩・移動 | 第三発表 ①②③④ | 休憩・移動 | 第四発表 ①②③④ |

**４　研究発表主題**

| | ① | ② | ③ | ④ |
|---|---|---|---|---|
| 第1発表<br>13：10～<br>13：55 | 災害時における危機管理<br>若狭町立 岬小学校<br>教頭　山下　正通 | 学習指導におけるＩＣＴ活用の在り方<br>～児童のICT活用を中心に～<br>嶺南教育事務所 研修課<br>研究員　松井　昭男 | 人間関係形成・社会形成能力を育てる教育相談の在り方<br>～予防的・開発的教育相談による、キャリア形成に関わる諸能力の育成～<br>嶺南教育事務所 研修課<br>研究員　竹原　誠 | |
| 第2発表<br>14：05～<br>14：50 | 人と人とのつながりを大切にし、差別の解消に向けて積極的に行動する子どもを目指して<br>～高同研地域教材部会の研究活動の概要～<br>高浜町学校同和教育研究会<br>地域教材部会代表<br>高浜町立内浦中学校 教諭　松見　眞希 | 主体的に学ぶ子どもの育成のための授業と教材の工夫<br>～学び合いから学習の喜びを味わい意欲を高める～<br>嶺南教育事務所 研修課<br>研究員　伊藤　元宣 | 多様な機関との連携を通して、障害児保育を考える<br>美浜町 あおなみ保育園<br>副園長　吉本　典子 | |
| 第3発表<br>15：05～<br>15：50 | 自分の思いや考えを伝え合う力の育成のために<br>敦賀市立 粟野小学校<br>教諭　橋本　ユミ子 | 新設特別支援学級を学校はどう支えたか<br>～支援を行う３本の柱～<br>小浜市立 口名田小学校<br>教頭　澤田　利夫 | 学び合う集団に高めていくための人権教育の在り方<br>嶺南教育事務所 研修課<br>研究員　堀口　美紀 | 中学校３年間を通じた環境学習プログラム<br>～学校の特性や地域性を生かして～<br>若狭町立 三方中学校<br>教諭　呉林　寛隆 |
| 第4発表<br>16：00～<br>16：45 | 仲間とともに顔晴れる生徒の育成<br>小浜市立 小浜中学校<br>教諭　古跡　修聡 | 不登校および不登校懸念児童・生徒の復帰への対応の在り方<br>～初期対応を含めたチームとしての具体的な関わりから～<br>嶺南教育事務所　研修課<br>研究員　松宮　弘明 | 国立若狭湾青少年自然の家の自然体験活動について<br>国立若狭湾青少年自然の家<br>主任企画専門職　井上　誠一郎 | 子どもと教職員と事務職員がつながる学校財務<br>～事務職員としての学校経営参画に向けたアプローチの在り方～<br>若狭町立 瓜生小学校<br>主査（事務）　浦谷　時生 |

☆今年度から発表者と参加者が学び合うことができるよう、すべての発表において一枠の発表時間を４５分間としました。協議・交流・体験等を盛り込んだ参加型の研究発表会にしていきます。

**５　その他**　　☆詳細については、嶺南教育事務所ホームページを御覧ください。

☆お問い合わせは、嶺南教育事務所 研修課　教育研究発表会担当　まで。

TEL：　0770-56-1302　　FAX　：0770-56-1391

# 参考図書

■エドワード・O．ウィルソン「生命の多様性」上・下　岩波現代文庫（採用内定者研修図書）

この本の主題である生物多様性ほど、今日人類に差し迫った科学的問題を想像することはできない。生物多様性は進化の中でどのように育まれてきたのか。なぜ人類にとって決定的な意味をもつのか。どうすれば守ることができるのか。ウィルソン博士は豊富な体験と驚嘆すべき博識にもとづいて情熱的に説き明かしていく。「生物多様性」を地球環境問題のキーワードにした名著。（Amazon ウェブサイトより）－写真は上巻－

■養老孟司「唯脳論」ちくま学芸文庫（採用内定者研修図書）

文化や伝統、社会制度はもちろん、言語、意識、そして心…。あらゆるヒトの営みは脳に由来する。「情報」を縁とし、おびただしい「人工物」に囲まれた現代人は、いわば脳の中に住む―脳の法則性という観点からヒトの活動を捉え直し、現代社会を「脳化社会」と喝破。さらに、脳化とともに抑圧されてきた身体、禁忌としての「脳の身体性」に説き及ぶ。発表されるや各界に波紋を投げ、一連の脳ブームの端緒を拓いたスリリングな論考。（Amazon 筑摩ウェブサイトより）

■齋藤 孝「子どもと声に出して読みたい実語教」致知出版（読者からの紹介図書）

社会の中に道徳の意識、規範意識が薄れつつある現代に、今一度この日本をつくってきた人々の生き方や智恵を学ぶことが必要ではないでしょうか。平安時代に生まれ、江戸時代の寺子屋で使われ、明治まで約千年間使われていた実語教。まさに、日本人の生きる基礎をつくってきた教科書とも言える本です。ぜひ、これから大人になる子どもたちや先生方に読んでいただきたいので紹介します。（読者からの紹介文より）

# 芦泉荘からのお知らせ

期間：26年3月31日まで（日曜日～木曜日ご宿泊の方）

～ 新年・年賀状当選番号お年玉プレゼント ～

期間中、ご宿泊の方で下記番号当選者へプラン割引をプレゼント！

当選番号：下2ケタ番号　**２６番／４５番**

年賀状

□□□■■

通常組合員価格
1泊2食付11,500円
「文殊コース」

→

お１人様
**１０，０００円**

- ご予約の際、当選の旨をお伝えください。
- ご来荘の際にフロントへ当選年賀状をご提出ください。
- お預かりした年賀状へ受付印を押印させていただきます。
- 当選年賀状１枚で１グループご利用いただけます。
- この割引をご利用になる場合は皆様「文殊コース」となります。
- 芦泉荘独自の割引（500円券）は使用できません。

詳しいお問合せについては　TEL：0776－77－3200 までご連絡ください。

# バックナンバーをホームページに掲載しています。

福井県のウェブサイト「学習・教育」のページに教育情報誌「明日への学び」のバックナンバーを掲載しています。（http://www.pref.fukui.lg.jp/doc/gakukyousei/asuhenomanabi.html）

明日への学び　で検索してください。

# ご意見をお寄せください。

住所　：福井市大手 3-17-1

**連絡先：福井県教育庁学校教育政策課**

TEL　：0776-20-0295
FAX　：0776-20-0668
Mail：gakukyousei@pref.fukui.lg.jp